第 3 回里海国際ワークショップ（インドネシア）報告

柳　哲雄（国際 EMECS センター）

第 3 回インドネシア Satoumi 国際 Workshop が、BPPT（インドネシア応用技術庁）・国際 EMECS センター・PICES（北太平洋海洋科学機構）・水産庁・インドネシア海洋漁業省の主催により、ジャカルタにある BPPT 中ホールで、約 120 名が参加し、2015 年 10 月 7-8 日に開催された。この Workshop は 2013 年のジャカルタ、2014 年のペカロンガンに続くものである。

10 月 7 日（水）午前は、BPPT 長官の歓迎挨拶に続き、柳が Satoumi の定義と、Satoumi と EBM（Ecosystem Based Management）・CBM（Community Based Management）・ICM(Integrated Coastal Management)の関係に関する基調講演を行った。その中で、環境省環境研究総合推進費 S-13 で行っている「持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理手法の開発」に関する研究の概要についても紹介した。

続いて、J.P.Ducrotoy（ハル大学）が EU における Satoumi 関連研究、S.Soebjakto（インドネシア海洋漁業省）がインドネシアにおける Satoumi 概念に基づいた持続的養殖活動の試み、J.Appe（インドネシア高等教育庁）がインドネシアにおける海洋調査技術革新、T.A.Taufk（BPPT）がインドネシアの Satoumi テクノパーク設立構想、の紹介を行った。

午後は I.Chaidir（インドネシア科学政策庁）がインドネシアにおける科学技術政策の中での Satoumi 関連政策の位置づけ、S.Sachoemar(BPPT)がカラワン・バンテン・ペカロンガン・ジャカルタ湾における Satoumi 創生活動、M.Wells(PICES)がカラワンにおけるエビ養殖への Satoumi 概念適用結果、広田（水産庁）がインドネシアの Satoumi における人間福利解析、N.Susanna（バンドン工科大）がカラワンにおける Satoumi 概念に基づく多栄養段階養殖結果、に関する報告を行った。　その後、柳の司会で総合討論が行われ、「養殖池のような閉鎖系と沿岸漁業のような開放系で Satoumi 概念の適用方法は異なるのか？、Satoumi－生態系サービス－人間福利の定量的な関係は明らかにされているのか？」、といった自然・社会科学に関する深い議論が行われた後、「海洋国家インドネシアにとって水産・海洋資源の重要性は言を待たないが、オープンアクセス可能なこれらの資源は近年の乱開発により危機に瀕している。この危機に、日本で提唱された Satoumi 概念を応用することで、インドネシア経済水域で「自然と人間の新たな関係」を打ち立て、劣化した海洋生物多様性・生産性を増加させることは有意義である。Satoumi 概念はインドネシアの国策として BPPT から提案された「社会のための水産・海洋資源の持続的利用―GAPRA SPL-SFiCoMS」と

調和的である。ジョコ新大統領の呼びかけにより、地域産業振興のために今後５年間インドネシア全国で約100ケ所のテクノパーク設立構想が推進されるが、この構想の一環として、少なくとも２か所でSatoumiテクノパークを推進することがSatoumi創生に有効である。」ことが確認された。

10月８日（木）はジャカルタの北約50kmにあるSeribu島の養殖施設見学が行われた。この島ではエビと魚の養殖が行われているが、同じ場所に養殖したmilkfishの骨取り工場とSeafoodレストランが併設されていて、骨を抜き二枚開きにしたmilkfishのてり焼きが提供されていて美味だった。さらに、このレストランでは養殖したテラピアの刺身もワサビ・醤油付きで提供されている。経営者に聞くと、この刺身は地元の人々にも好評だそうで驚いた。インドネシアの田舎の養殖場ですでに漁業の６次産業化が成功している。

10月７日のワークショップの際には、里海に関するエメックスセンターのこれまでの取り組み状況、これまでのエメックス会議の開催状況、環境省環境研究総合推進費S13プロジェクト等に関するポスターを展示し広報活動を行った。